

## あとがき

埼玉県在住の私と佐渡との関わりは、妻とその家族に由来する。

佐渡市 旧真野町生まれの妻と所帯を持ってから三十年が過ぎ、ここ数年は大げさに云えば佐渡近代政治史の研究に目覚め、遺跡に竹ペラをふるう考古学者にも似た高揚感を持ちつゝ、佐渡の文書を捲る日々を持つ事が出来た。

今にして思えば、妻と共に毎年佐渡に渡るようになって、当初の二十五年は、淡雪豆腐で食事し、五島牛乳を飲んで、成長する子供達と夏の島を楽しみはしたが、足元に昔の佐渡があることに気づかず過ごしてきた。

最近の私を 妻は「佐渡荒らし」と呼ぶ。

ここ数年の私の佐渡荒らしを支援して下さったのは、後述する島の先学の方達である。

島外の研究者を支援するのが家代々の仕事と云って憚らない 真野新町の山本修巳先生は、私に複製刊行を提案し、支援の挙げ句にこの本の版元まで引き受けて下さり、齋藤長三の出版事業についての論文までも頂いた。

佐渡市教育長としての多忙な日々の中で、私の間違いだらけの複製原稿に目を通して下さり、序文まで頂戴した石瀬佳弘先生には、近代には佐渡各政党の集会に使われた「佐渡郡農会堂」の、今は大和に移築された姿を見せて頂いた事もあった。佐渡政党史稿の中で各党派の大会が数多く開かれたと書かれている「佐渡郡農会堂」は、現在も大和の草原に昔の面影を残している。

北吟吉研究に勤む本間恂一先生には、吟吉と長三の邂逅についての論文を頂いた。吟吉と長三の協調と確執について、交わされた書簡等から本間先生に書き起こして頂く事、そして山本先生に「北斗」を中心とする学術雑誌の刊行に励んだ頃の長三について書いて頂く事は、私が佐渡政党史稿複製を目指す過程でのひとつの目論見でもあった。これらの望みが実現する事がなんと心楽しいかを今更ながら感じている。

三人の先学の指導と激励には幾らお礼を述べても述べ尽くせない。

新潟県立文書館で佐渡郡役所文書の閲覧に手を貸して下さった田中聡氏、相川文書館での佐渡新聞等の閲覧に手助けを頂いた三浦啓作氏、原稿校正に助力を頂いた市教育委員会の北見継仁氏、橘鶴文庫閲覧に便宜を頂いた佐渡総合高校稲岡校長と本橋克先生、両津郷土博物館収集の鶴飼文庫文書を閲覧させて下さった野口敏樹氏、貴重文献を貸して下さった菊地初雄氏、野澤卯市について教えて下さった赤泊の野澤孝夫氏、本間一松の写真等を提供して頂いた本間一元氏、表紙を飾った近藤福雄の写真を提供下さった近藤勝子氏、長三の家族写真を提供頂いた名畑昭三氏、名畑岐氏など、私の覚束無い研究と刊行を助けて下さった各位にもお礼申し上げる。

そして、元々面識のない私に多量の長三文書、長三の歴史のすべてを委ねて、この刊行の端緒を開いて下さった長三後裔、齋藤文夫氏には特に感謝する次第である。

更にこの本を読まれる各位に紹介したいのは、ここ一年、共に研究した仏國留学生で京都大学研究生、ラドミラル・ギョーム氏との交流である。彼は「佐渡の近代政治家達の思想形成と政治

活動の動機付けを親族系譜、地域系譜などの観点から統計的に捉える事」をテーマとして、佐渡でのフィールド・ワークを行っている。彼の存在と研究テーマは、中弛みになりそうな私の長三研究のモチベーション維持に大変貢献をしてくれた。

夏の島でのフィールド・ワークで彼と二人、某家から拝借した文書を道端のコンビニで10円コピーしている時、私は、なんの巡り合わせでか この仏人と佐渡の夕日を浴びながらいつ終わるかしの作業をしている自分の、余りの非日常さにふと気づいて そのことに驚き、彼は彼でその日の諸家 転戦に疲れ果てながらも、紙幣をコインに換えるためにレジに向かっている、そんな事もあった。

私には、合理的に過ぎるように思える彼の研究が、大成功するか否かはにわかに判断できない。

しかし、その決着を見るまで彼の研究に付き合い、自分も齋藤長三 以降の更なる佐渡近代政治史研究に励むつもりである。

また、有り難く思うのは、見知らぬ私に島の昔について話してくれた大勢の古老達である。

北一輝が試掘に失敗したとの逸話がある木金山鑛山が稼がれていた頃の昔語りをしてくれた東鶴島の古老は、木金山鑛山の坑道に入った少年の頃の話に続けて「昔、物資は海から来た。」と、小佐渡の海沿い集落が陸路に依存出来なかった頃の事を、冬に備える薪割の手を休めて語ってくれた。

また、大須や背合で個人採掘が行われた狸穴の場所に案内してくれた古老など、その時は名も聞かず、御齢のみを聞いて別れた彼等、もし没すれば、島の何もかもが忘れ去られると不安を覚える程、彼等の知見は豊かである。

古老と云えば、真野吉岡に住む私の義父も九十歳にならんとしているが、文書漁りに渡海してきた不肖の婿のために、夕食の仕度をして待っていてくれた事もあった。

食卓を囲みながら、その日に訪れた小佐渡の村々が話題となり、昭和初期まで、畑野から清水寺の辺りを経て、小佐渡の分水嶺を越え、柿野浦や東鶴島、岩首へ抜ける「清水寺越え」の山道がまだ現役であり、畑野や新穂で開かれる定期の市には海辺の人々が海産物を持って出掛けて来ていた と話してくれる。

食事の後、近代の頃には真野新町の産業のひとつでもあった「漆塗」に話が及び、「新町塗」がこの家にもあるかと聞くと、ふたつの小さな塗椀を棚から出してくれた。外は黒く内は朱に塗られた椀は、箱膳に合わせるためか小振りで、作りは幼く 島内のための道具だなど思う。

「汁を飲むのに なにを気取ることがある。」という気分が佐渡らしいし、今は無い木工旋盤を操る家業を「くりくり屋」と呼ぶのも、私には好ましく聞こえる。

義父に無心して自宅に持ち帰ったこの塗椀は、私にとって義父が教えてくれた、最も大切にしたい佐渡の近代である。

佐渡政党史稿の文字起こしを行う日々、私が描き続けたモチーフは、政党史稿の随所に出てく

る「島の無名の政治家達が、二重廻しのマントや羽織の裾を翻して、小木街道や海沿いの道を疾駆する姿」であった。

私は齋藤長三や野澤卯市など著名な地方政治家達よりも、いつかの郡会選挙の折りに、たまたま候補者の詮衡委員に挙げられたために、この本の人名索引に名を残すことになった無名 無数の政治愛好家達の心境に、より強く惹かれる。

彼等を一時的にでも政治に熱中させた原動力は、現代の我々にはまったく理解出来ない近代特有の充実感に違いない。彼等の行動原理は、現代を受動的に生きる私達が いつの間にか失ってしまった、自分の國を自分で作る志 に根ざしていると思われる。

この本の写真収録のために菊地初雄氏から貸与して頂いた写真集「佐渡郡肖像録」の序文は冒頭「自治の根本は結局 郷党の団結に俟たなければならぬ」と書いている。

この郷党と云う言葉は、この本の本間恂一氏の論文に書かれている、北吟吉と齋藤長三の間で交わされた書簡にある「一島一党を理想とする」と云うテーマに通じ、彼等二人だけでなく当時の島の政治家達に共通した理想だったと思われる。

この本に名を連ねる、江戸晩期と維新直後に島で生まれた八百人以上の地方政治家達の行動も、郷土と国土を我がものと思う、愛郷と愛國を基にしたものであったろうと私は推測する。

文末ではあるが、読者各位にこの本の不完全さについてお詫びを申し上げる。

編者の浅学、著者の記憶違い、底稿本が謄写版であった事、余りの多量頁などが相俟って、未だ氏名、地名等に誤りがあると思われる。ご指摘を賜りたい。

また、人名索引に於いては十分な人物特定が行えなかった事が悔やまれる。八百余名のすべてを特定したかったし、今後もこの索引の充実を図りたい。

人名索引の人物達について、読者各位、特に後裔の方に、生年、住所、職業、家系などについてもお教え下さるようお願い申し上げます。

そして、この複製本が今後の佐渡郷党の団結に、僅かでも役立てば望外の喜びである。

平成十七年三月一日

風間 進

編者住所 〒333-0833 埼玉県川口市西新井宿45-6

E-Mail RXH02611@nifty.com

複製 齋藤 長三 著 佐渡政党史稿 風間 進 編

発行 平成十七年三月一日、初版  
編集者 風間 進  
発行者 山本 修巳  
定価 三千五百円（税、送料別）

発行所 佐渡 郷土文化の会  
新潟縣佐渡市真野新町354  
電話 0259-55-2700

印刷所 株式会社 アラジンイデア  
東京都千代田区一ツ橋2-4-3  
光文恒産ビル  
電話 03-5276-7100